

むずかしい決断を迫られる例

重い病気にかかった猫の管理と安楽死について厳しい環境の中で野生猫が生き残るには健康であることが絶対条件です。しかし、安楽死に関しては、はっきりと賛否両論に分かれています。概念そのものを忌まわしいとして認めない個人／団体もあります。彼らによると、どの猫にも「生存権」があり——たとえ、その「生活の質」がどんなに悪くとも——つまり、いかなる状況にあっても安楽死など考えたくないというのです。一方、人間が動物に与えられる最も心やさしい行為のひとつが「不治の病」や「どうしようもない苦痛」から解放することであり、その場合には安楽死こそが人間に課せられた「義務」であると考える人もいます。苦痛を取り除くため積極的に行動しない人は、その苦しみに加担しているというのです。人に慣れた飼い猫なら治療の施しようがあっても、動物福祉団体には現実問題として財政的にも大きな重荷を負わせる場合があります。例えば、「ネコ・インフルエンザ」は、野生化した群れでは一種の「風土病」のように蔓延することも多いのです。野良猫にとって、拘束されて治療を受けるのは大きなストレスになります。適切な医療と看護の提供が困難なら、他の猫に伝染するのを防ぐ意味でも、苦痛を与えない方法として安楽死が最も望ましいとも言えるのです。

病気の検査

野生化した猫は病気を持っている恐れがあり、他の野良猫や飼い猫に脅威を与えかねないので、財政が許す限り、検査すべきです。主なウイルス性病気には、FeLV (ネコ白血病ウイルス感染症) と FIV (ネコ免疫不全ウイルス感染症) があります。この2つの病気は生命にかかわるもので、一度群れの中に感染が入り込むと、致死率が高いため、結果として、群れの存続自体が危ぶまれさえします。2つの病気の検査 (FeLV と FIV の共通テスト) は麻酔をかけた状態で簡単にできるので、余裕があれば受けさせて、不妊手術後に解放するすべての猫について「陰性」の確認を得るのが望ましいのです。どちらかの病気に「陽性」反応が出た猫は安楽死させることで、苦しみを長引かせながら死ぬのを防ぎ、また、仲間の猫や他の飼い猫に病気が広がるのを回避すべきです。1つの群れのうち、5-6匹だけに FeLV / FIV 検査をすればいいのです。結果が陰性であれば、それ以上検査する必要はありません。この病気は、(喧嘩する習性がある) 去勢していないオス猫に感染の危険が最も高いのです。

妊娠した猫の管理

なつきやすい子猫でも里親さがしは大変です。まして、野生の子猫に飼い主を見つけるのは不可能に近いので、新たに数匹の子猫を誕生させるかどうか、決断を迫られます。野生化した猫を「子育て」のために数週間拘束するのは、大変なストレスを与えます。母猫は子猫をさわられるのを嫌うので、彼らは野生として育ち、人間に対して神経質でこわがるようになります。痛ましい決断とはいえ、妊娠中絶も、人道にかかった、もっともな選択として考慮しなければなりません。ストレス状態の猫を何週間もケージに閉じ込めておいたり、衰弱した猫にまた数匹の子猫を産ませた挙句……きちんと育てられず、引き取り手なしに……それに比べると、「むずかしい選択」ととはいえ、まだ救われるのではないのでしょうか？

早期不妊手術

野良猫の早期不妊手術は、引き取り手の見込みもないのに何週間もケージに監禁したり、安楽死させるのに比べて、はるかに人道的手段だといえます。野生化した子猫を従来の手術時期である生後6か月まで野放しにしておくと、捕えるのもむずかしいし、すでに妊娠していたり、お産を済ませてしまっているメス猫も多いのです。子猫が健康で、麻酔と手術の腕が確かであれば、早期不妊に何の問題もないことは、多くの例が立証する通りです。ほとんどの猫は、以前に比べて回復も早く、術後数時間で群れに戻ることができるのです。

野生猫の扱い方

さわらぬネコにたたりなし！ ボランティアは全員、破傷風、狂犬病、肝炎の予防をしておきます。噛まれたり、ひどく引っ掻かれたときは、直ちに傷口を洗ってから、緊急治療を受けます。猫は見かけ以上に悍猛で、ストレスを受けていたり、麻酔の後は特に危険なので、どんな時でも、手でさわらない方が賢明です。「ネコかぶり」を信用するな！——これが鉄則です。傷を負う危険を甘く見てはいけません。適切な装備を整えることで、怪我を防ぎ、猫にもトラウマを感じさせなくて済むのです。クラッシュ・ケージ (=トラップから移しかえる時に用いるケージ) は、怪我の危険がなく、猫を安全に扱うのに役立つ便利なものです。野生猫は、絶対に手でつかもうとしないこと。幼い猫でもひどく噛むことがありますから。肩までの長い手袋をはめて、引っ掻き傷を防ぐ方法もありますが、大きいものが多く、手の小さい人には使いにくいと思われます。手袋は、はめているから噛まれても大丈夫と錯覚しやすいので、トラップやケージを運ぶときだけに限った方がいいでしょう。

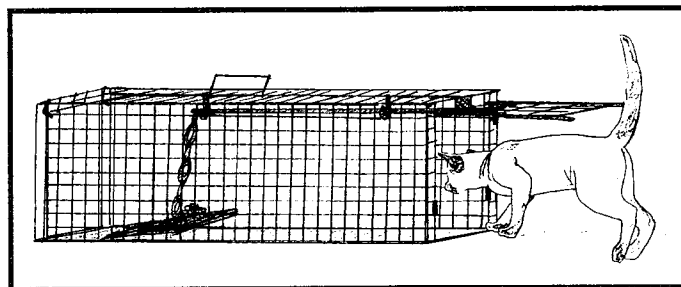
トラップからクラッシュ・ケージに移しかえる時には必ず2人で行ないます。おびえた猫が逃げようとしてケージを動かすので、しっかりと押さえていなければなりません。助手がいない場合は、ケージの片方の端を壁などに固定して置きます。逃げ出す危険を避けるため、作業は、戸外ではなく屋内で行なうのが原則です。猫を移し入れた後、ケージの扉を紐か留め金で厳重に閉ざし、絶対に開かないことを確認します。追い詰められた猫が扉を揺さぶって開け、あっという間に逃げ出してしまう……となると、再び捕まえるのは至難の技です。捕獲器からクラッシュ・ケージに移すのにてこする時は、小さいスプレーに水を入れて、勢いよくさーっと吹きかけてやると、猫は動きます。ひどく引っ掻かれることがあるので、顔を猫に近づけないこと。ゴーグルかバイザーをつけると目をプロテクトできます。異様な格好ですが、目を守るためにはやむを得ません。

トラップで捕獲する

捕獲は、非常に時間のかかる作業で、沈着さと忍耐を要します。群れの規模と健康状態を事前にチェックしておきます。定期的に餌やりをしている人がいれば、協力を求め、成猫、授乳中の母猫、妊娠中のメス猫、子猫などに分けて、各グループ別に数を確認します。トラップはできるだけ速やかに、組織的に設置します。繁殖期は、授乳中の母猫が子供を失ったり、また、妊娠中のメス猫が流産する危険も多いので、ボランティアや近所の人を悩ませがちなこの時期を避けた方がいいでしょう。

できれば、数日前から同じ所で同じ時間に餌を与えて慣れさせておきます。猫は習性の動物なので、いつもの餌の時間に捕獲するのが最適です。ワナを仕掛ける予定日の前には空腹にさせておきます。いつも餌を与えている人がいれば、食べ物をその辺りに残しておかないように伝えます。猫を手なずけて餌をあげている人は、食事が数時間遅れても嫌がるものですが、なんとか上手に説得しましょう——「結局はあの子たちの幸せのためになるんですよ……」と。

余裕があれば、数日前から、いつもの餌やりの時間に、区域内の数個所に (仕掛けが作動しない状態で) トラップを設置し、猫に慣れさせておきます。



猫は夜行性なので、夜遅く捕えるのが望ましいのです。明け方と夕暮れどきも向いています——特に、暑い季節には。猫は雨を嫌うので、大雨のときにワナを仕掛けるのは時間の無駄です。不妊手術を受けるまでに長く待たされることのないよう、捕獲のタイミングを測ることが重要です。手術日の前夜か当日の早朝に捕えるのが最適でしょう。手術前数時間は餌を与えないように。ただし、幼い猫は、長く絶食させると、麻酔の後で低血糖症に陥る恐れがあります。疑わしいときは、獣医にみせます。暑い季節、